

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 (学 術)	氏名	淵 上 千 香 子
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論 文 題 目			
崎山多美研究 — 「私」と「他者」の物語—			
論文審査担当者			
主 査	教授 竹村 信治		
審査委員	教授 山元 隆春		
審査委員	教授 佐々木 勇		
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、崎山多美（1954～ ）の現在に至るまでの作家活動について、その「物語を書く行為」（「物語行為」）の軌跡を明らかにすることを目的とした研究である。</p> <p>「沖縄人の女」としてしか理解されない「私」をどのように語ることができるのか、を文学的課題として出発した崎山は、「沖縄」「女」をめぐる既存の物語との拮抗関係のなかで別の物語を書き続け、そこで「沖縄人の女」ならざる不透明な「私」を問い、同様に不透明な「他者」（「島（シマ）」〈「沖縄」〉「女」等）と出会い直し、両者の関係のあり方を模索する。本論文は、そうした崎山の物語行為の展開を「他者」に対する「私」の立ち位置の探究の軌跡として辿り直し、その意義を、差別と排除の眼差しをもって「他者」をカテゴリー化し、暴力的にイメージを付与し、名付け、自らとは異質な者として切り離す事態が進行する現在、分断された状況を問い直し、「他者」を「実体ある他者（異文化）」（不透明な「他者」）として発見しつつ向き合い、呼びかけ、交渉するための視座を読者ととともに獲得しようとする営みとして認め、評価している。</p> <p>構成は、序章（全4節：問題意識・研究の着眼点・先行研究と本研究の姿勢・論文構成）、結章（全3節：崎山の物語行為について—「コトバ」を書くことにおいて見出される「私」と「他者」の関係性—「名づけ」との向きあい方—「女」を例として—・課題と今後の展望）の間に以下の3部9章を措き、末尾に補論「崎山多美の近作について」（全2節：「コトバ」を生み出すことにおいて存在する「私」—「崖上での再会」及び単行本『うんじゅが、ナサキ』—・「未来」への「責任」と「祈り」）を加えている。</p> <p>第一部「私」を語ることは、第一章：「島」と「私」の距離—「水上往還」—、第二章：「わたし」の語り—「くりかえしがえし」—、第三章：虚構の「わたし」—「水上揺籃」—からなる。「私」を支えるものは「島」にあるとして「島」を書こうとする崎山は、「水上往還」において、場所としての「島」が根拠たり得ず、唯一記憶に残る祖母との、すなわち人との関わりに根拠を見出していく【第一章】。次いで、「くりかえしがえし」においては、「島」は「シマ」となり、「私」は「わたし」として語り手となり、仮構された「わたし」は「私」の根拠を求めて「シマ」を「くりかえしがえし」語り直し、音と声を人との繋がりを示すものとして発見していく【第二章】。そして、「水上揺籃」では、複数の物語の中に生きる存在、その中に生きる存在としての「わたし」が語られ、「シマ」という様々</p>			

な「他者」の演ずる舞台の中で演技をする「わたし」という虚構の中にこそ「私」が生きている事態が発見されていく【第三章】。第一部では、こうした物語行為の分析を通じて、「私」の根拠を求めて書き続け「他者」を発見していく崎山の営為が跡づけられている。

第二部「「他者」を語ること」は、第四章：「他者」からの呼びかけ—「オキナワンイナグングァヌ・パナス」「ゆらていく ゆりていく」「ホタラ綺譚余滴」一、第五章：「他者」と出会い直すこと—「アコウクロウ幻視行」「マピローマの月に立つ影は」一、第六章：「他者」の声を語る「コトバ」—「クジャ奇想曲変奏」—からなる。ここでは、「私」の根拠としての「他者」との繋がりをめぐって、その「他者」の言葉を書くことを問題化する崎山の営みが辿られる。「日本語」によって伝達しえない空白を示す「シマコトバ」（「オキナワンイナグングァヌ・パナス」）、共同体内の語り「しまくとうば」における「他者」の声の排除（「ゆらていく ゆりていく」「ホタラ綺譚余滴」）【第四章】、そうした「他者」とその声を語ろうとして立場を取りかねる「私」（「アコウクロウ幻視行」）、「他者」の物語への欲望を作り替えながら「他者」ともう一度出会い直そうとする「私」（「マピローマの月に立つ影は」）【第五章】、「にほんご」を話す「オレ」に「私」を投じ、「他者」と関わりながらその声を「日本語の言説空間」における「コトバ」にしようとする「私」（「クジャ奇想曲変奏」）【第六章】。その全ての「他者」の言葉を書く試みは「私」との間に空白を残す。第二部ではその困難を開かれた問いとして発見する崎山の、「他者」との出会い直しを通じた物語行為が論じられている。

第三部「「他者」を語る「私」を語ること」は、第七章：「他者」の声の表象化をめぐって—「月や、あらん」一、第八章：書く登場人物「わたし」—「うんじゅが、ナサキ」「ガジマル樹の下に」一、第九章：「イマ」の「わたし」の語り—「Qムラ前線a」「Qムラ前線b」「Qムラ陥落」—からなる。ここでは、第二部の問いを引き受ける形で崎山の近年の作品が取り上げられ、「コトバ」として聴き取られない「他者」の声をどのように「コトバ」にできるのかとの問いへの崎山の応答が論じられている。「他者」と向き合って「コトバ」を生み出そうと奔走する「私」（「月や、あらん」）【第七章】、「他者」の体験に向きあおうとその体験を綴り直し、「他者」の「コトバ」と自らの「コトバ」を結びつける、その繋ぎ目に浮かび上がる「私」（「うんじゅが、ナサキ」「ガジマル樹の下に」）【第八章】、「わたしではなかった」かもしれない者の「コトバ」を自らのものとして「わたし」が発するところに生成する、「他者」の繋がりをもった「私」（「Qムラ」三部作）【第八章】。それらは2016年11月に単行本『うんじゅが、ナサキ』として編成されるが、そのことは、崎山の物語行為の現在がこうした「他者」との関係性をもった「私」の発見にあることを示すとしている。

本研究の意義は以下の点について認めることができる。

- 1) 崎山多美の作家活動の全体を「物語を書く行為」に即して跡づけたこと。
- 2) 他者論、ポストコロニアル論、ジェンダー論などとの接続を通じて崎山多美のアクチュアリティを明らかにしたこと。
- 3) 崎山多美を沖縄文学作家の範疇を超えて論ずる視界を開いたこと

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成 29年 2月 6日

